

海外ニュース

インドの井戸への
アプローチ

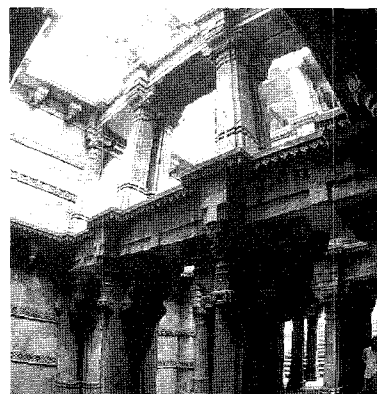
小林 茂雄

昨年秋、インドのニューデリーでCIE（国際照明委員会）の第23回大会に中村助教授と共に出席した。CIEは、全世界を対象とした、唯一の照明技術分野における国際組織であり、大会は4年毎に開催される。今大会の参加総数は約730名で、特にインドからは約350名もの参加があり、熱心に発表内容を吸収しようとする姿勢が感じられた。

学会終了後、デリーから鉄道とバスにより南へ移動した。移動手段は決して快適といえるものではなかった。途中の道で出される食事は必ずといってよいほどカレーとミルクティーであり、香辛料の辛さと砂糖の甘さで味覚は麻痺しかかっていた。数日後、アラビア海に近いアマダバード駅に到着した。ここでは、ダーダー・ハリ・ヴァーヴという、井戸を訪れる。井戸といっても、地下水面まで垂直の穴があるだけではなく、インドの特にこの地方に数多く見られるのは、地下水の湧き出す場所まで、幅広い階段が繋がっているものである。階段と井戸から成り立っていることから、ステップウェル（stepwell）と呼ばれている。ダーダー・ハリ・ヴァーヴは、インドに点在するステップウェルの中でも、最も代表的かつ典型的なものの一つである。

駅からリキシャと言われる自転車による人力車に乗り、凹凸のすさまじい道を前後左右に揺れながら、20分くらいで到着した。標識も立っておらず、地上に表出しているのは小さな門だけである。その小さな門をくぐり、井戸へと降りていった。地上から地下水の湧き出るレベルまで、幅約5mの広い階段が、踊り場と交互に繰り返しながら深さ17mの底まで続いている。また、階段の両側壁からは、土圧に対する梁が架けられている。

一段一段、階段を地下に降りて行くにつれ、壁を支える梁や柱はさらに増してくる。同時に視界も暗くなり、だんだんと闇に包まれるようになってくる。しかし、入り口では真暗で見ていなかった階段の下の方も、目が順応することによって徐々に輪郭が表れてきて、光と影による大胆で微妙な調子が感じ



地下に向う階段に林立する角柱

（ダーダー・ハリ・ヴァーヴ、インド・クジャラート州 15世紀末）

とるようになった。階段の最も下部に着いたところで後ろを振り返ると、頭上よりも随分高いところに空との境界線が小さく切り取られているのが見えた。改めて、随分地下に潜ったんだということが分かった。そして、ぼんやりとしか見えない最下部をそのまま水平に進んでいくと、突然、八角形の大きな吹き抜けに当たった。上方は空に向かって垂直に開け放たれており、開口部からは圧倒的な太陽光が差し込んでいる。地上から階段に向かって徐々に暗くなって圧迫されていた空間が、ここで一気に解き放たれた感じである。そしてこの場所がかつて水が溜まっていたらしく、この開放的な場所で人々は水と接していたと思われる。しかし、吹き抜けの前にはさらに一つの小さな縦穴があった。そこをゆっくりくぐってみると、薄暗い空間の中に静まりかえった水面が表れた。ここが本来の井戸であった。円形の井戸は、簡素な形のまま地上まで細く長く続いており、装飾された八角形の吹き抜けとは対照的である。強い日差しを受けずにひんやりとして、また周囲の音もほとんど聞こえない。地下に潜っているという不思議な感覚とも合わさって、この場所には単なる水たまりとしてではなく、精神的な力を持っていることを感じとれた。実際、この場所がかつて、人々が行水をしたり生活に必要な水を得ていただけではなく、浄めの沐浴をはじめ様々な宗教儀式が執り行われていたといわれている。ここでは水は万物の母として崇拜の対象となっていたのである。そう考えると、地上の入口からこの水面へと向かう光と空間の変化の過程は、身廊から交差廊を経て礼拝堂へ向かう、教会におけるアプローチの変化にも似ていたような気がする。

（大学院総合理工学研究科

人間環境システム専攻 助手）